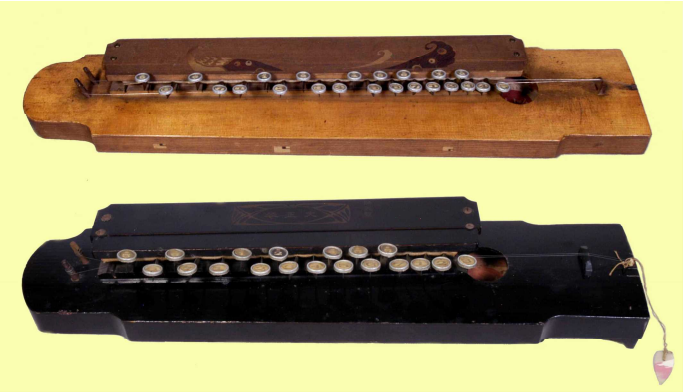
大正ロマンの音色を奏でる
ー森田吾郎の発明・大正琴ー

■大正琴の発明

大正ロマンの音色を奏でる大正琴は、森田吾郎（本名・川口仁三郎）によって1912（大正元）年に発明された。 大正琴は邦楽器である二弦琴に、タイプライターのキーのメカニズムを応用した鍵盤装置を付けた鍵盤付き弦楽器である。森田は、発売日の9月9日の重陽の節句（菊の宴）に因み、この鍵盤付き弦楽器を「菊琴」として発売したが、大正元年の発売であったので「大正琴」と呼ばれるようになった。

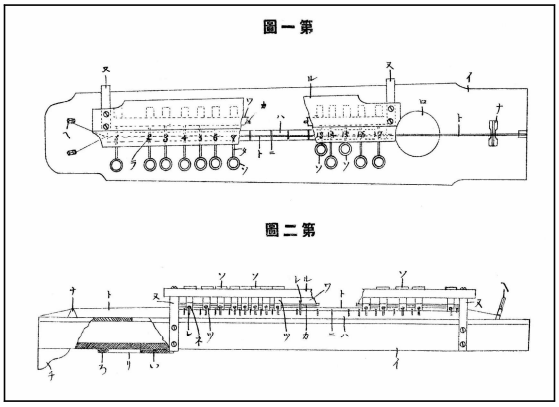


大正時代に制作された大正琴
上：浜松市楽器博物館蔵　下：舩橋楽器資料館蔵

■大正琴の構造と特徴

森田吾郎発明の大正琴は、実用新案「大正琴」の図に示すように、数字の付いた音階ボタンをタイプライターのキーを打つように押すと、二本の弦を音階ボタンの位置で押さえ、振動する弦の長さがその音階に対応する長さに変わり、音階ボタンの音を奏でる。音階ボタンの配列は、ピアノやオルガンなどの西洋の鍵盤楽器と同じで、1オクターブの音程を12等分した12平均率を奏でることができる配列である。

森田は、大正琴発明に際して念頭に置いたのは、(1) 持ち運びが便利であること、(2) 価格が手ごろであること、(3) 子供から大人まで誰もが楽しめる楽器作りであった。森田が大正琴に秘めた夢とロマンは、今日の大正琴愛好者約100万人に受け継がれている。



森田吾郎の実用新案「大正琴」（第26149号）の
大正琴の平面図と正面図

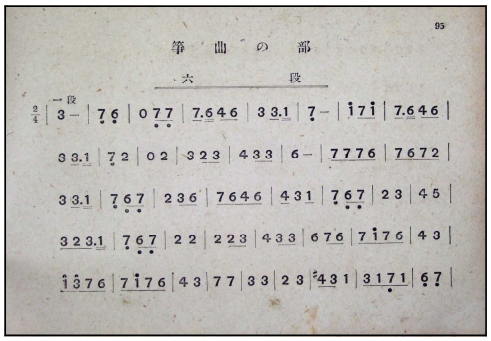
■大正琴の普及と音楽教育への貢献

大正琴は、当初はそれほど売れ行きはよくなかった。従来の楽器には見られない形状であったため、演奏法がわからなかったからである。1914（大正3）年秋、天覧（天皇がご覧になること）を賜ることになり、新聞で紹介されると、全国に注目される楽器となった。その普及発展をさらに後押ししたのは、同年に出された大正琴譜である。この楽譜は、図に示すような数字譜で、音階ボタンに対応した数字で楽譜が書かれているため、特別な教育を受けなくても、容易に演奏できた。この数字譜により大正琴は誰もが楽しめるようになった。

大正琴が登場した頃、文部省は、学校における音楽教育に西洋音楽の導入に力を入れていて、唱歌は必修教科となった。大正琴は、12平均率の楽器であったため、学校で学んだ唱歌を家庭で演奏することができた。当時の大正琴教則本に学校唱歌が掲載されていることからも、大正琴が、学校の音楽教育にも影ながら大きく貢献したと言えよう。

（寺沢安正・石田正治）

大正琴を弾く女性　　出典：『大正琴独習乃友』大正8年



大正時代の大正琴譜
出典：『浜松市楽器博物館企画展 大正琴の世界　図録』